

横浜市 歴史博物館 NEWS 22 2006・3

◇いんたびゅー 大塚初重

「遺跡の整備は景観、場所の雰囲気、時代の味などをなるべく残すべき」

◇企画展「弥生の人びとの眠る場所」によせて

◇＜研究余話＞「吉田新田の開発」

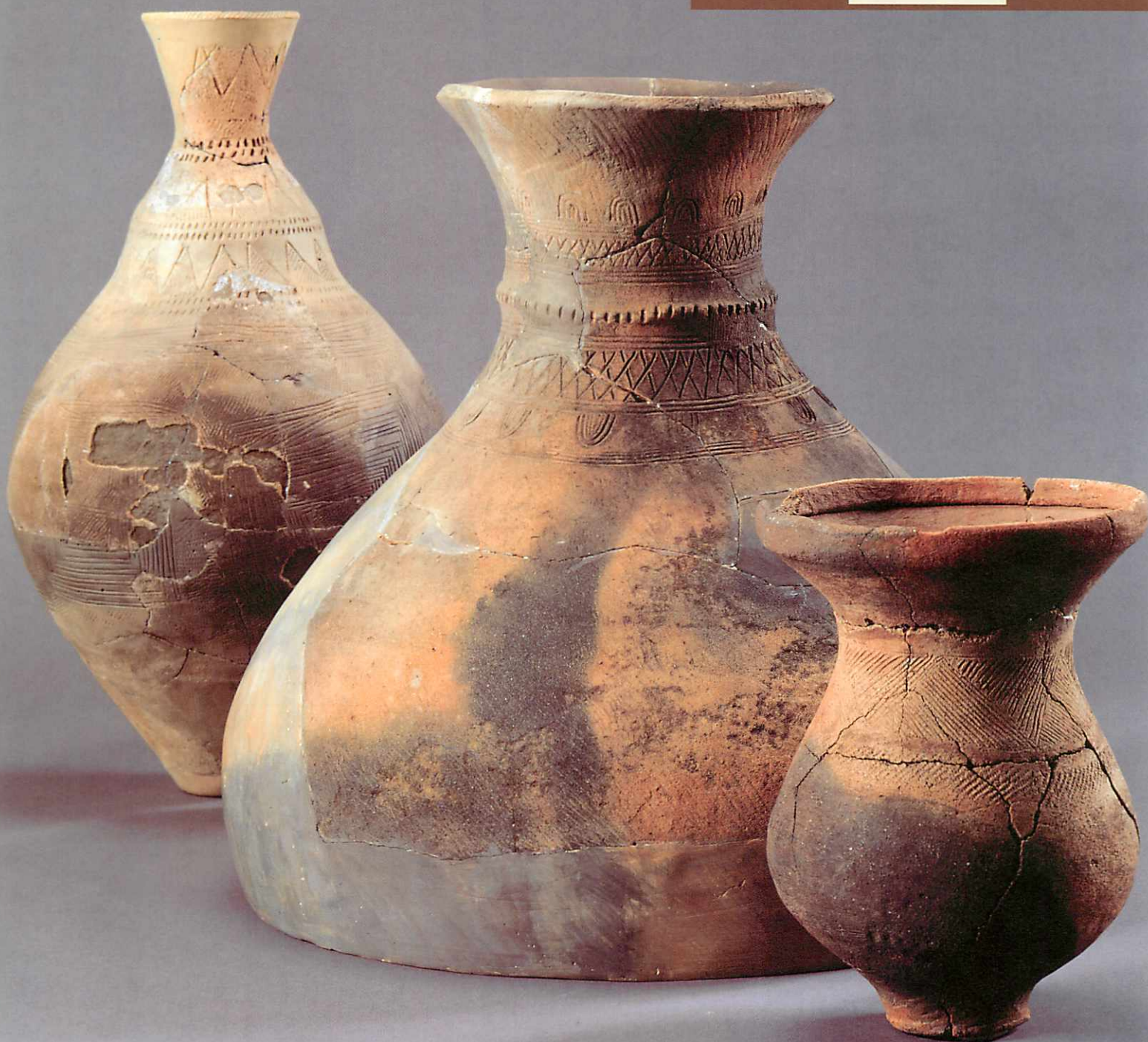
◇収集・収蔵資料の紹介 [23] 犁

◇＜常設展示室探検＞中世鎌倉のわらじ屋

◇狂言「浦島」公演報告

◇くちいヒミュージアムショップたいむ 新商品紹介「土鈴 縄文の犬・縄文土器粘土」

◇＜知ってますか?＞博物館で通販やっています



明治大学名誉教授
大塚初重
(おつか・はつしげ)

遺跡の整備は
景観、場所の雰囲気
時代の味などを
なるべく残すべき



◎歴史に興味をもった理由は何ですか。

戦争が関係しています。私は商業学校を卒業後、軍属として海軍水路部に勤め途中から海軍に志願しました。あのころ旧制中学を出たらみんな「お国のために」と軍隊や軍需工場に行ったものです。私は半年の訓練の後、海軍下士官になり、上海の氣象隊勤務を命じられて佐世保から船に乗りました。その船が韓国の済州島沖でアメリカの潜水艦に沈められた。暗夜の漂流中に助けられて門司に帰り、また乗船したら、撃沈された。その時、思いました。「神風は吹く。神国日本は不滅だ」と教えられたのに、出てはやられ、出てはやられる。皆、死んでいく。おかしいじゃないか、と。その時に、もし、命があつて日本に再び帰ることができて、仕事ができるとしたら、小学校か中学校の教師になって、科学的な根拠に基づいた建国の歴史を講義したい、と思ったのです。

土の中から先祖の営為

◎それでなぜ、考古学を専攻したのですか。

すか。

昭和二年に復員して、昼間は商工省特許標準局に勤めながら明治大学の夜間部に行きました。その最初の授業が考古学でした。そこで初めて、考古学という学問があることを知って、興味を持ったのです。そのころ、静岡の登呂遺跡の発掘調査が始まり、各大学の学生が参加して、私も行きました。弥生時代の住居跡で、土を掘っていくと、木の板が顔を出す。田んぼに土砂などの侵入を防ぐための杭と矢板なのです。先祖の営為を示すものが、自分の手と目で確認できるので、その時「汗水垂らして掘り出したものが、ものを言うのが考古学だ。これをやるう」と決心しました。

遺跡の何を引き出すか

◎遺跡の保存・整備の現在の動向について、どう考えていますか。

いくつもの建物を復元して、公園化というか、テーマパークのようになっていく遺跡もありますが、私は、遺跡の整備には、自然の景観、その場所の雰囲気、

遺跡の時代の環境をなるべく残すことに、もう少し心を砕いてもいいのでは、と思います。実際、どこの遺跡の整備でも「景観や当時のことを考えて」とよく言いますが、私の経験も含めて、言葉通りにはいけません。それほど遺跡の整備は難しいのです。「これが正しい」と言えるものはないのですが、百点と言えるものも見つかりません。だからまず、その遺跡の何を引き出すのか、考えることが大切でしょう。たとえば古墳の場合、自然のままで、あまり手を掛けない方がよい。きれいにきっちり整備すると、日本人の感性に合わないのです。それでも、築造当時のままの形を復元するため、葺き石（古墳の墳丘面を葺いた石）を露出させて整備する例はいくつかあります。いくつも古墳が並んでいるところでは、一つぐらい、露出させて、古墳の構造がどうなっているのか、見せるのもいいと思います。

遺跡生かした市民運動

◎博物館の活動と遺跡の活用について

は。群馬県高崎市群馬町にある八幡塚古墳では、葺き石を復元して、さらに、その中に並んでいた約六千本の円筒埴輪も復元して並べることにしたのです。それで私が、墳丘上段の円筒埴輪は業者に発注して、残りは全部、地元の人たちに、この古墳の特徴をもった埴輪を作ってもらおう、その代わり、作った人の名前を埴輪の裏に入れてもいいことにしよう、と提案しました。それで、町の博物館に埴

輪の工房と窯を設けて、そこに来てもらって作るようにしました。自分たちで遺跡を復元する、という市民運動が広がった、といえるでしょう。これは、遺跡を活用した博物館活動として、うまくいった例だと思います。横浜市歴史博物館と大塚・歳勝土遺跡のように博物館と遺跡がつながっている場合、博物館で展示を見た人の意識が、そこにある遺跡に結びつくようにすることが課題です。

◎横浜市歴史博物館に期待することは。

私が講演会で博物館に行った日は日曜で「感謝デー」ということもあって、子ども連れの方がぞろぞろ来ていました。これには驚いた、というより感動しました。地域社会との関係づくりがうまくいっている、ということでしょう。学芸員をはじめ、館内で働いている人が生き生きしている。あれだけ来場者があつて、職員に活気があれば、次のステップを考えて行動しよう、という力も出てくるはず。そういう意味でも、この博物館は恵まれていると思いました。

▽おつか・はつしげ プロフィール

●一九二六年、東京都生まれ。明治大学大学院文学部研究科博士課程修了。日本考古学専攻、専門は弥生時代と古墳時代全般。同大教授・文学部長、日本考古学協会会長、山梨県立考古博物館館長、同県埋蔵文化財センター所長を務める。現在、登呂遺跡調査整備検討委員会委員長。二〇〇五年、瑞宝中綬章を受ける。

●編著書 『日本考古学を学ぶ13』(有斐閣選書) 『日本古墳大辞典』(東京堂出版) 『日本古代遺跡事典』(東国の古墳と大和政権) (吉川弘文館) 『最新日本考古学用語事典』(柏書房) 『古墳時代の時間』(「弥生時代」の時間) (学生社) 『東アジアの装飾古墳を語る』(雄山閣) 『古墳時代の日本列島』(青木書店) ほか多数。

大塚・歳勝土遺跡国指定二〇周年・遺跡公園開園二〇周年記念企画展

「弥生の人びとの眠る場所」

—方形周溝墓と環濠集落—

によせて

当館から連絡橋を渡った位置に、大塚・歳勝土遺跡公園があります。この遺跡は、弥生時代中期後半に営まれた集落遺跡であり最大延長六〇〇メートルにおよぶ環濠

や、のべ二一五軒におよぶ竪穴住居址や一〇棟の掘建柱建物が見つかった大塚遺跡と、そこに居住した人々の墓である方形周溝墓が二五基見つかった歳勝土遺跡です。これ

一つとして行われました。この調査は、一つ一つの遺跡の姿を明らかにするだけではなく、地域全体として遺跡と遺跡の関係をも念頭に置いたものでした。

このような調査の結果、大塚遺跡は環濠に囲まれた集落の全体像が明らかになりました。環濠集落の存在は大塚遺跡の調査以前からも知られていましたし、横浜市内でも先に調査された青葉区にある朝光寺原遺跡などでも確認されていきました。しかし、

大塚遺跡は環濠集落の完全な姿が確認された最初の遺跡だったので、これを受けて、当館では一九九五年に開館を記念して「弥生の「いくさ」と環濠集落」と題する特別展を、二〇〇一年には全国各地の環濠集落の調査・研究成果を受け、環濠集落を持つ機関の協力の下「甦る環濠集落」と題する特別展を開催しました。

一方で、歳勝土遺跡で見つかっている方形周溝墓は弥生時代を代表する墓制の一つであり、それが横浜でも採用されていたということは、当時の横浜の様相を考えるうえで非常に重要です。また、先述したように大塚遺跡だけではなく、大塚・歳勝土遺跡として国指定史跡とされているように、

居住域と墓域がセットとして発見・調査されたことは、研究史的にも非常に大きな影響を与えました。

方形周溝墓は、横浜で生み出された墓の形ではありません。より西方から伝わってきたものだと考えられます。これは単に墓の形が変わったというだけではなく、なぜ形を変えたのか、埋葬された人たちにどのような変化があったのかなど、問題点はつきません。また、墓に葬られた人、葬った人の検討を行うことで弥生時代の人と人のつながり方の一端も明らかにすることができます。つまり横浜地域での方形周溝墓という墓の出現は、それを造った人々の生活や人びとのつながり、ひいてはその人たちが作り出した文化などにも変化があったことがうかがわれるのです。

今回の展示は、大塚・歳勝土遺跡の国指定や遺跡公園開園の周年記念展であると同時に、川崎市市民ミュージアムと府中市郷土の森博物館とともに「弥生・古墳・飛鳥を考える」という共通のテーマをもつて開催します。当館は弥生の方形周溝墓を中心としますが、川崎では古墳時代の墓を、また府中では飛鳥時代の墓の様相を中心とした展示となります。3館の展示を通して見ていただくことで、弥生時代から飛鳥時代にかけての墓の変化やその背景にある各時代の社会の変化も知っていただければと思います。

会期 四月八日(土)～六月二五日(日)

(中川 二美)



発掘当時の歳勝土遺跡

この節目の年を記念する企画展を開催します。
大塚・歳勝土遺跡は一九七一年から一九七四年にかけて発掘調査が行われました。これは現在、港北ニュータウンとして知られている地域の大規模な開発に先駆け、地域内に存在した遺跡調査の

吉田新田の開発

一、吉田新田の概要

横浜市役所や神奈川県庁が存在する横浜

浜の中心部・関内の西側には、大岡川・中村川とJR京浜東北線（根岸線）によって囲まれた平坦地が存在しています。

この地域はかつて現在の中区元町あたりから北へと伸びる横浜村の砂州によって東京湾と仕切られる入り海であり、三五〇年程前の明暦二年（一六五六）七月から江戸の材木・石材商人であった吉田勘兵衛が中心となって行われた新田開発により耕地化され、（武蔵国久良岐郡）吉田新田と命名されました（当初は「野毛新田」「野毛村新田」と呼ばれていました）。

吉田新田は、西端に位置する日枝神社（通称「おさんのみや」）を頂点とし、東側の東京湾に向かってしだいに広がっていく釣鐘状の地域で、一一六町三反五畝八歩（一町一〇反、一反一〇畝、一畝一三〇歩、一歩一坪の換算で約三五万坪）の広大な面積であり、この内九四町一反四歩が水田、二〇町三反八畝二三歩が畑、一町八反六畝一歩が屋敷となっています。こうした新田を取り囲むよ

うに、大岡川・中村川・海に接する外縁には総延長四一五八間（一間一メートル八〇センチ換算で、七四八四メートル）の堤が築かれていました。水田に不可欠な用水の取水口は、釣鐘の頂部にあたる日枝神社周辺に設けられ、そこから現在

の大通り公園をルートとして流れる中川を中心に、多くの分水路により新田のすみずみまで供給されていたと思われます。新田内部における地名は、新田を南北に貫く六本の道によって分けられた「一つ目」「二つ目」「七つ目」（海寄りの東側が「一つ目」、それより順次西側へ移るに従い数を増していく）という呼称と、

新田中央部を東西に流れる中川を基準に分割される「南」「北」を合わせることにより、「南一つ目」「北六つ目」などといった呼称がなされています。

以下、石野瑛『横浜旧吉田新田の研究』に所収・紹介されている文書を中心に、吉田新田の開発過程について概観してみます。

二、開発資金の調達

先述したように、吉田新田の開発は明

暦二年（一六五六）七月一日に開始されました。工事は順調に進展したとおもわれますが、翌明暦三年（一六五七）五月一日からの大雨のため、一三日に潮除堤が流失して失敗に終わっています。この第一回目の開発工事については資料が残されておらず、詳しいことは不明です。

それから二年後の万治二年（一六五九）二月一日に再度の開発工事がはじまります。明暦年間工事の失敗からわかるように、入り海とはいえ海面を埋立・干拓する吉田新田の開発はリスクが高く、開発にあたっては吉田勘兵衛を中心に、複数の人物が資金を支出したようです。

請取申金子之事

合金子五拾兩ハ江戸小判也

右ハ金沢領野毛村新田境（堤力）之入用金ニ儲ニ請取申候、新田之割ハ十口二割、五口ハ惣中間へ取申候、残五口ハ金本へ取申候、右之金子五拾兩ハ我等内へ御入候、金高ニ応じ新田之地広狭可有候、金本とも新田地割候時分貴殿へも割口可遣候、少も違背申間敷候、仍為後日如件

万治貳年

亥ノ八月十日 坂本七兵衛（花押）
柚川作之丞殿

右の史料は、二度目の工事が開始されてからほぼ半年後の万治二年（一六五九）八月一日に作成された「請取申金子之事」という文書で、「金沢領野毛村新田」（吉田新田）の「入用金」五〇兩が柚川

表 元禄13年(1700)吉田新田地目別面積表

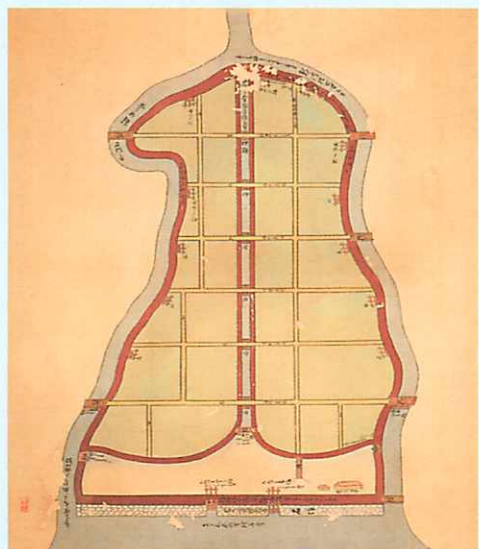
地目	面積
上田	10町2反3畝02歩 (8.8%)
中田	20町5反8畝27歩 (17.7%)
下田	63町2反8畝05歩 (54.4%)
小計	94町1反0畝04歩 (80.9%)
上畑	4反4畝25歩 (0.4%)
中畑	3町6反9畝06歩 (3.2%)
下畑	16町2反4畝22歩 (13.9%)
屋敷	1町8反6畝11歩 (1.6%)
小計	22町2反5畝04歩 (19.1%)
総計	116町3反5畝08歩 (100%)

出典:元禄13年「武州久良岐郡吉田新田辰御年貢可納割付」

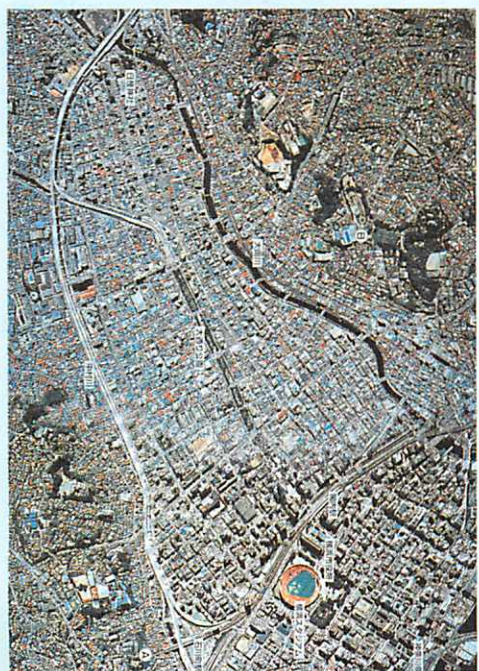
注:1町=10反、1反=10畝、1畝=30歩



開発前の吉田新田（吉田貞一郎氏所蔵）



開発後の吉田新田（吉田貞一郎氏所蔵）



吉田新田風景変化模型（常設展示室）

作之丞から坂本七兵衛へ支出された際の受領書です。注目すべきは「新田之割ハ十口二割、五口ハ惣中間へ取申候、残五口ハ金本へ取申候」という文言で、それによれば新田開発の資金については、全体を一〇口に分け、五口を「惣中間」、残りの五口を「金本」が、それぞれ支出することとしています。「金本」は、全体の五割を負担する最も多額の出資者であることから、新田開発の中心人物である吉田勘兵衛が該当するでしょう。また、残り五割（五口）については「惣中間」と称される共同出資者たちが支出していることになり、おそらく坂本七兵衛もそうした「惣中間」の一人と考えられます。そして、「惣中間」に加入している人物も、他から出資を募ったものと推測され、史料にみられる柚川作之丞も、そうした「惣中間」の一人である坂本七兵衛に対し

て出資した人物と思われます。

次に留意すべきは「金高二応し新田之地広狭可有候、金本とも新田地割候時分貴殿へも割口可遣候」という記述で、「新田地割候時分」＝新田開発が終了した際に、出資した金額に応じて耕地（の所持権）を分配するという内容になっています。柚川作之丞による五〇両の支出は、いわば開発完了後における土地分配を前提にした先行投資ということになります。

三、開発地の分割と吉田勘兵衛による集積

こうした資金調達により、開発工事は順調に進展したと思われ、工事開始から三年後の寛文二年（一六六二）二月には最初の小作証文が作成されます。すでに新田を取り囲む堤の築造はもとより、新田内部における田畑の地割や用水路の確

定などの施設整備が完了し、農民を入植させ開発した田畑の生産性を高めるという段階に進んでいることがうかがわれます。ただし、寛文二・三年時の小作証文の宛名は「新田御中間衆中」となっており、新田の生産力が安定していないため、「金本」＋「惣中間」による共同管理が行われていたと思われます。その後、翌四年時には吉田勘兵衛宛の小作証文がみられるようになり、この間に投資金額に応じた田畑の分割が行われたと思われます。新田の総面積一六町三反五畝八歩から推測すると、一口あたりの面積は一二町前後ということになります。

しかし、日枝神社付近の取水口から取得する水によって水田稲作を行う吉田新田の場合、耕地の所有者が分かれていては用水の維持管理上都合が良くなかったためか、寛文九年（一六六九）～延宝三

年（一六七五）にかけていったん分割された新田内の耕地を、吉田勘兵衛は買い取りにより集めていきます。現在残されている文書だけでも、この七年間に吉田勘兵衛が取得した耕地合計は二六町九反六畝二八歩余、その代金は五七五両に達します。なお、取得した耕地の旧所持者は、坂本養庵二二町四反七畝二三歩、砂村三郎兵衛一三町二反九畝五歩、友野与右衛門一町二反で、坂本養庵（史料にみられる坂本七兵衛と同一人か関係のある人物であろうか）と砂村三郎兵衛の所持地が「惣中間」における一口分に近似していることから、この両人は一口分の出資をしていたと推測されます。こうした新田内における吉田勘兵衛の土地取得により、吉田新田全体が勘兵衛の所持地となっていくのです。

（斉藤 司）

犁

犁は、牛馬に牽引させて主に水田を耕していた農具です。

人が鉄を振り下ろし、冬を経て固く締まった水田の稲株や土を起こすのは、とても



無床犁 長250×高55×幅15cm 小岩井陽子氏旧蔵
栄区鍛冶ヶ谷付近で使われていた在来犁です。鉄は犁先だけに用いられています。重心が高く、操作は不安定であったと考えられます。

力のいる仕事でしたが、犁の登場によって牛馬の力を借りてその仕事ができるようになりました。出土資料などから、日本に伝来したのは六・七世紀頃と考えられています。

横浜・市域で犁が使われるようになったのは、水利の改良や耕地の整理によって水田の乾田化が進み、近代短床犁という使いやすく改良された犁が登場した明治末から大正期以降のことと考えられています。市域内陸部は相模野台地や多摩丘陵の東端にあたり、水田の多くはいわゆる「谷戸田」でした。丘陵に開かれた谷筋を利用した「谷戸田」は、小高い丘に挟まれているために日陰となる場所が多く、そこはフカンボやドブツタと呼ばれる水はけの悪い湿田となりがちです。軟らかい土質の湿田では、牛馬は脚をとられて思うように動けず、犁

の操作も不安定になってしまいます。この「谷戸田」という地理的条件が、市域の犁の普及に影響を及ぼしていたと考えられているのです。

ところが二〇〇二（平成一四）年に、栄区の鍛冶ヶ谷付近で使われていた、明治期以前のものであると思われる在来型の犁が見つかり、当館に収蔵されました。この犁は地面に接する床の部分ほとんど無い無床犁に分類され、長さは二メートル五〇センチと大きく、犁の先から握りにかけて緩やかなS字を描き、起こした土を反転させる犁へらがないといった特徴があります。これは三浦半島や房総半島で使用されていた在来型の犁と似ています。また昨年には、港南区の笹下付近や青葉区の寺家町で、長床犁と分類される在来型の犁が使われていたことがわかりました。なかでも寺家町の犁は東京都足立区や葛飾区などで使われていたものに似たタイプです。

このような在来型の犁が栄区や港南区、青葉区といった「谷戸田」が見られる地域で確認されたことで、これまでの考え方は説明ができなくなり、犁という農具を改めてとらえ直すことが必要となってきました。さらに、なぜ市域の中で異なったタイプの在来型の犁が使われるようになったのか、新たな疑問も生じています。

耕運機やトラクターにその役を譲り、農具としては今では全く使われなくなった犁ですが、今後は新たな横浜の地域像を語る資料として評価されることになるかもしれません。

（刈田 均）

常設展示室探検

中世鎌倉のわらじ屋

中世展示室には、国宝「一遍上人絵伝」の巻五「小袋（巨福邑）坂」部分の模型があります。一遍上人は鎌倉時代に全国を旅して布教した時宗の開祖で、これは上人が弘安五年（一二八二）に鎌倉に入り、小袋坂で執権北条時宗に出会った場面です。



屋の左端にはさまざまな品物をお店があり、軒からわらじがぶら下がっています。わらじは当時の人々の大切な足もので、とくに旅人や商人は多く脚絆の上にならじを着けました。しかしわらじは約一日しかもちたず、仕事や旅先で新しく替える必要があったので、寺社の門前や町の出入り口などの店先には、わらじが吊るされていました。鎌倉小袋坂のわらじもそのような人々のために販売されていたのです。

狂言「浦島」公演報告

昨年の一〇月三〇日（日）、開館一〇周年記念特別展「よこはまの浦島太郎」関連事業として、国立能楽堂のご協力のもと、古典芸能の一つである狂言「浦島」の公演を行いました。当館では初めての試みでし



狂言「浦島」の一場面 左・赤松裕一君、右・野村小三郎さん

たが、午前と午後の二回の公演で、延べ二三四人のお客様にご鑑賞いただき、大変好評を得ることができました。

狂言とは、能（猿楽）とともに発展した中世芸能の一つで、能の幕間に演じられる滑稽なセリフ劇です。

江戸時代には戯作者や狂言役者自身によっていくつもの脚本が制作されており、この「浦島」もおそらく江戸時代に、庶民に人気のあった物語をパロディ化して創られたと考えられます。

狂言「浦島」の内容は、丹後国（京都府）の浦島翁が、あるうらかな日に浜辺に行き、孫の釣り上げた亀について、その命にまつわる不思議な物語を聞かせます。物語に感動した孫が亀を海に放つと、沖合から亀の精が現れてお礼に玉手箱を与えます。浦島翁がその玉手箱を開くとみごと翁は若返った、と



解説をする 国立能楽堂・諸貴洋次さん

いうものです。亀を助ける慈悲の心と永遠の命をことばぐおめでたい物語です。

浦島翁を演じたのは、和泉流狂言方の野村小三郎さん、子方は観世流シテ方の赤松禎英さんのご子息・赤松裕一君、また亀の精は和泉流狂言方の重鎮である野村又三郎さんでした。当日の舞台をご覧いただいた方は、小三郎さんの老人になりきる演技の妙、又三郎さんの舞や謡の重量感、そして裕一君の澁刺（はつらつ）として透明な声に魅了されたことでしょう。また公演に際しては、国立能楽堂の諸貴洋次さんに浦島の見どころをご解説いただきました。

この狂言「浦島」は、近年までながく途絶えていました。もともと和泉流野村家に代々伝わった脚本が戦災により失われ、内容が分からなくなっていたのです。しかし平成十一年に野村小三郎さんが同家に伝わる記録をもとに、現在の技巧も取り入れてみごと復活をさせました。生まれ変わった狂言「浦島」は、いまだ数回の上演しか行われておらず、横浜で演じられたのは、当館が最初です。

横浜市にかかわる曲目には、狂言「浦島」のほか、たとえば能の「六浦」があります。今後も市域の歴史と古典芸能を結びつけた事業を行っていきたいと考えています。

（阿諏訪 青美）

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

新商品紹介
土鈴 縄文の犬・
縄文土器粘土



土鈴 縄文の犬 1,575円（税込）
縄文土器粘土 840円（税込）



井戸端会議の様子。

ショップにかわいい犬の土鈴が入荷いたしました。博物館NEWSで以前にもご紹介した、平田篤史さんの縄文シリーズの新作「縄文の犬」です。

写真をごらんください、ユーモラスな表情がなんともいえない味。この額から鼻先にかけてのまっすぐなライン（額段（ストップ）というそうです）が浅いことが縄文の犬の特徴のひとつです。その他には立ち耳と、同じくツンと立った差し尾（あるいは巻き尾）にもその特徴が表れているようです。

犬は今年の干支でもあるし、安産祈願にも使われるし、縁起がいいこと間違いなし！ひとつひとつが手作りですので、表情がそれぞれ違います。お気に入りの子を見つけてください。

同じシリーズで「縄文土器粘土」も新発売。説明書は付属しませんが、少し上級者向けです。興味のある方は店頭でお問い合わせください。

平田さんのシリーズにはユニークな商品が入荷しますので、これからも楽しみにしてください。

これからの催しもの

- ◎大塚・歳勝土遺跡国指定20周年・遺跡公園開園10周年記念
 - ・企画展「弥生の人びとの眠る場所」4月8日(土)～6月25日(日)
 - ・講演会「弥生時代社会と大塚・歳勝土遺跡」5月7日(日)
 - ・ジャンボ土器を焼く 5月5日(金・祝) 雨天の場合は6日(土)
 - ・講座「わたしが発掘しました」6月11日(日)
- ◎歴史講座
 - ・「初めての横浜の歴史」5月10日～6月14日 毎週水曜日 連続6回
 - ・吉田新田開発350周年記念「変わる横浜の形ー横浜の開発ー」6月21日～7月19日 毎週水曜日 連続5回
- ◎ラストサタデープログラム
 - 毎月最終土曜日は博物館へ！ 学芸員による常設展示解説、ほか

表紙写真は

大塚遺跡の環濠から出土した特徴的な壺型土器です。手前の土器は大塚遺跡では少数派の広口の壺で、器面が赤く飾られています。中央の土器は大塚遺跡の中でも最大級ですが下半部が失われています。また、奥は横浜以外の地域から持ち込まれたと考えられているものです。

?????? 知ってますか ??????

博物館で「通販」やっています

当館では、博物館刊行物と一部のオリジナルグッズを通信販売しています。オリジナルグッズは、現在「双六」「まがたまキット」の2商品を扱っておりますが、今後も通販取扱商品を増やしていく予定です。

通販ご希望の方は、下記の要領でご購入ください。取扱商品については、博物館ホームページでご覧いただけます。もちろん、お電話でお問い合わせもOKです。

お待ちしております！

ご購入方法

商品名・数量・送料先を明記のうえ、商品代金+送料を郵便振替または現金書留でご送金ください。

郵便振替の場合

(口座番号) 00290-0-85231 (口座名義) 横浜市歴史博物館

現金書留の場合

(送付先) 〒224-0003 横浜市都筑区中川中央1-18-1

横浜市歴史博物館 庶務係



(2005年10月1日～2006年3月31日)

- 10月8・9日 体験学習「土偶づくり」
- 10月22日 開館10周年記念特別展「よこはまの浦島太郎ー中世説話から現代までー」開催 (11月27日まで)
- 10月30日 特別展関連 古典芸能「浦島」上演
- 11月13日 特別展関連講演会 小峯和明「その後の浦島太郎」
- 11月19日 体験学習「風車づくり」
- 11月20日 体験学習「ぞうりあみ」
- 11月24日 ふるさと横浜探検「浦島伝説の舞台を訪ねてー子安から神奈川へー」
- 12月10日 「平成17年度横浜市指定・登録文化財展」「横浜の遺跡展」開催 (1月15日まで)
- 12月17・18日 体験学習「風づくり」
- 12月24日 エントランスホールコンサート「シリーズ」音楽演奏 X'mas Family concert in 歴博
- 1月8日 「横浜の遺跡展」研究講座 武井則道「横浜の弥生時代ー集落と墓地からうかがう米作りの開始ー」
- 1月18日 古代史講読講座 (2月15日まで連続5回)
- 1月28日 企画展「諸岡五十戸」木簡と横浜ー大宝律令以前の支配システムを探るー 開催 (3月19日まで)
- 1月28・29日 博物館感謝デー
- 1月29日 開館11周年記念特別講演会 大塚初重「戦後の日本考古学と横浜」
- 2月4・5日 体験学習「紙すき」
- 2月4日 企画展関連研究講座「古代の諸岡郷をさぐるー「諸岡五十戸」木簡の語るものー」(於・菊名地区センター)
- 2月19日 企画展関連研究講座「諸岡五十戸木簡」と地域社会
- 2月26日 チャレンジ土器づくり (3月25日まで連続3回)
- 3月5日 企画展関連講演会 市大樹「五十戸木簡の世界」、鳥羽政之「熊野遺跡と評の役割」
- 3月9日 企画展関連「官衙遺跡見学ツアー」
- 3月23日 ふるさと横浜探検「国史跡鉢形城跡とさいたま川の博物館を訪ねて」

横浜市歴史博物館 日誌

読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。ニュースに関する感想やご意見をお寄せ下さい。お寄せいただいた方の中から5人の方に博物館オリジナルグッズをさしあげます。はがきもしくはFAXで、①お名前、②ご住所、③年齢、④このニュースを手にしたところ、⑤ニュースについての感想・要望、をお書きのうえ、5月31日までに、博物館「読者プレゼント係」までお送り下さい。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。



横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡

月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
〔「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分〕



駐車場あり(1時間200円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

編集後記

博物館開館から一周年を迎え、今年一〇周年を迎えます。また、国史跡に指定された二〇周年の年でもあります。記念企画展のほかに、いろいろな関連事業を行います。5月5日、子どもの日は遺跡公園体験広場で、「ジャンボ土器」の野焼きを行います。大塚遺跡から発掘された大型の弥生土器を復元し、焼き上げます。舞い上がる炎に包まれる土器の迫力ある光景をのぞきたいと思いませんか。ぜひ、この機会にお出かけ下さい。

